

レジュメ 第1回

発表者：田中 英矩

発表日：2025 年 9 月 3 日

範囲 Chapter 1, pp. 2–6. “AN OVERSIMPLIFIED SUMMARY OF THE LAST 120 YEARS”

概要

19 世紀末には心をめぐる哲学・心理学の議論が活発に行われたが、20 世紀に入ると分析哲学と現象学が分裂。両者間の交流はほとんどなくなり、敵対すらした。

心理学では、内観への注目の後に、行動主義が支配的になったが、後に認知主義が台頭したことで意識への関心が再燃した（というのが「通説」だが、実際はそう単純ではない）。

ただし、認知科学においても、現象学は周縁化されていた。

しかし近年、「現象的意識への関心」「身体化された認知」「神経科学の進歩」という 3 つの要因により、現象学の重要性が再認識され、認知科学との対話が再び活発化している。

目次

1	要約	1
1.1	テキストについて	1
1.2	分析哲学と現象学の断絶	1
1.3	心理学の展開の通説と、その批判的検討	2
1.4	なぜ現象学は周縁化されてきたか	2
1.5	最近の現象学の再評価	3

1 要約

1.1 テキストについて

概要 心についての哲学的問題を探求する。

どのように？ 哲学的アプローチだけでなく、科学的知見も積極的に参照する。また、議論する問題に対して、**現象学**の視点を採用する。

目的 現象学と分析的アプローチとの対話を再開させること。

1.2 分析哲学と現象学の断絶

19 世紀末 心をめぐり、思想家たちは互いに交流し影響を与え合っていた。

ジェームズ、シュトゥンプ、フッサール、ブレンターノ、フレーゲ、ラッセル、…

20 世紀に突入 各思想家のアプローチが分化。特に、

- フッサール：**現象学**を創始

- フレーゲやラッセル：**分析哲学**へと発展
- それ以降 心の分析哲学と現象学は、互いを無視・敵視する関係に。
- Marion (1998)：現象学が 20 世紀の哲学をけん引してきたと主張
 - Smart (1975)：現象学は「全くのナンセンス」
 - Searle (1975)：現象学には深刻な限界があり、「破産状態にあるとすら言いたい」

1.3 心理学の展開の通説と、その批判的検討

1.3.1 心理学の展開の通説

「内観 → 行動主義 → 認知革命」という展開が通説に。

内観 19 世紀末 -20 世紀初頭、実験心理学者は、心についての測定可能なデータを得るのに**内観** (introspection) に頼った。

行動主義 1913 年頃^{*1}、**行動主義** (behaviorism) が登場し、研究対象を観察可能な行動に限定。

ジョン・ワトソンが主導。50 年頃を最盛期に、70 年代まで台頭。cf. Watson (1924)

認知革命 その後 (1950 年代)、**認知的**アプローチが、行動主義に取って代わる。

計算モデル・脳科学の進展を背景とし、内的プロセスへの関心が再燃。

→ 1980 後半 -90 年代、**意識の神経相関** (neural correlates) の特定を目指した。

1.3.2 通説への批判

著者は、この「通説」は「歪曲され、過度に単純化されている」と批判。^{*2}

なお、現象学は内観主義的という理解は、誤解である (cf. Ch. 2)。

1.4 なぜ現象学は周縁化されてきたか

- 科学と分析哲学者は**自然主義** (naturalism) を、現象学者は非/反自然主義を採用する傾向。
→ 認知科学の登場時には、心の分析哲学のほうが相性が良かった (特に、計算モデルとの相性)。
- 分析哲学側も、重要な理論的基盤や概念分析を、認知科学に提供した (例：機能主義)。

→ 現象学は、この認知科学の枠組みから周縁化され、無関係とみなされた^{*3}。

^{*1} Watson (1913) を念頭に置いてのことと思われる [発表者]。

^{*2}

- 客観的測定は、19 世紀の初期の心理学研究でも一般的だった。
- 内観は、「内観主義者」自身によってもしばしば問題視された (Wundt (1900) など)。
- 心の計算論的理解は 18 世紀まで遡れる。そもそも、意識はそれ以前から関心の的だった。
- 「初期の心理学は内観主義的」は、行動主義を推進したかったワトソンの捏造であるという指摘 (cf. Costall (2004, 2006))。
- 認知主義は、実際には行動主義の継続であるという指摘 (Costall (2004))。
- 認知科学や中期分析哲学は、行動主義的思考の影響を受けていた。

^{*3} 例外：H. Dreyfus (1967, 1972, 1992) は、AI・認知科学の問題に対する現象学の関連を主張し続けた。

1.5 最近の現象学の再評価

最近, 以下の3つの要因により, この状況が変化している.

現象的意識への関心の再燃 Nagel (1974) を皮切りに, 多くの心理学者・哲学者^{*4}が意識の問題に再び着手.

「経験的側面を科学的に研究する方法は？」→ 現象学的アプローチが重要では^{*5}

身体化された認知 90年代に**身体化された認知 (embodied cognition)** の概念が強まる^{*6}.

メルロ＝ポンティに立ち返ることで身体化の重要性を強調.

神経科学の進歩 **脳画像化技術** (fMRI, PET) により, 被験者の経験報告に依存する様々な実験が可能に.

→ 実験構築や, 結果の解釈などのため, 被験者の経験を知りたいときがある.

→ 意識経験を記述するための信頼できる方法: 現象学?

^{*4} cf. Marcel & Bisiach (1988), Dennett (1991), Flanagan (1992), Searle (1992), Strawson (1994), Chalmers (1995)

^{*5} cf. Gallagher (1997), Varela (1996)

^{*6} cf. Varela et al. (1991), Damasio (1994), Clark (1997)